

日本イギリス哲学会関東部会 第94回研究例会

日時 2014年12月6日(土) 14:00~17:15

場所 慶應義塾大学三田キャンパス 研究室棟地下1階 第1会議室

プログラム

14:00~15:30

信託としての市場社会

—エドマンド・バーク『穀物不足に関する思索と詳論』を中心に—

立川 潔(成城大学)

15:45~17:15

証言と自然的徳

——ヒュームの証言論をめぐって——

萬屋博喜(日本学術振興会特別研究員 PD/関西学院大学)

関東部会担当 只腰親和 (tchika@tamacc.chuo-u.ac.jp)

矢嶋直規 (yajima@icu.ac.jp)

(◎を@にお直してください)

日本イギリス哲学会関東部会第94回例会（2014年12月6日、慶應義塾大学）

【報告要旨】

信託としての市場社会—エドモンド・バーク『穀物不足に関する思索と詳論』を中心に—

立川 潔（成城大学）

1795年のスピーナムランド制度は、ポラニー(K. Polanyi)とトムソン(E. P. Thompson)によって、経済が社会に埋め込まれていた時代、あるいは慣習が物価を規定していた時代から賃金が自由労働市場の需給法則によって決定される時代への最後の抵抗を示す事象と位置づけられた。バーク(Edmund Burke)は、彼らの提示した認識枠組にしたがって、同95年に執筆した『穀物不足に関する思索と詳論』における労働市場と穀物市場の自由放任の主張を根拠に、自由主義経済学者、あるいは「ブルジョア経済学者」と規定されてきた。ところがバークは伝統的な階層的な社会秩序をも擁護しているため、この2つの面をどう統合的に理解すればよいかという「バーク問題」が提起されることにもなった。

しかし、果たしてこうした認識枠組の中でバークを論じてよいものであろうか。報告で問題にしたいのは、ポラニーとトムソンの枠組の適否ではなく、バーク自身の認識枠組である。なるほどバークもまた転換期として自分の時代を捉えていた。しかし、彼にとっての転換の意味は、ポラニーやトムソンとは異なって、これまで市場の自己調整によって決定されてきた賃金や穀物価格に国家が介入し規制しようとする新たな動きが、この時期確実に現れてきたということなのである。つまりバークはこれまでの慣習を廃止して自由な労働市場を構築すべきだとして自由放任を主張しているのではなく、新たな国家介入を阻止して、農業者と労働者の市場での「取り決め (convention)」という慣習となっている賃金決定を維持すべきだと主張しているのである。誤解を恐れず敢えて言えば、バークは習俗を破壊する動きとして自己調整的市場から規制された市場への動きに恐怖しているのである。

報告では、以上のバークの認識枠組を、市場での人間関係を信託関係として捉える彼の市場社会観を中心に検討を加えたい。

証言と自然的徳——ヒュームの証言論をめぐって——

萬屋博喜（日本学術振興会特別研究員 PD／関西学院大学）

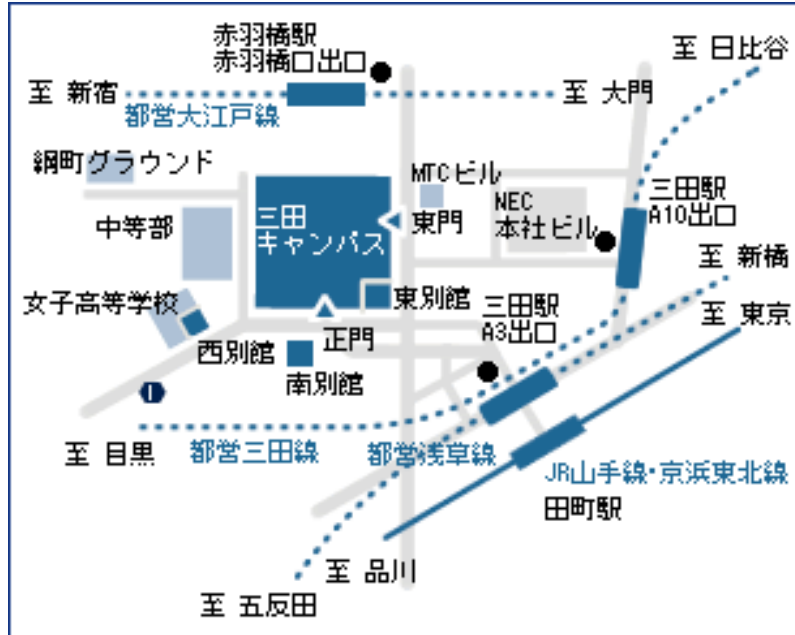
われわれがもっている多くの知識の源泉は、他人の証言 (testimony) に求められると思われる。実際、多くの人びとは、北極に降り立ったことがなかったり、身体を解剖して

臓器の状態を確かめたりしたことがなかったりするにもかかわらず、そうした事柄に関する他人の証言を介することで知識を得ることができる。だが、われわれはそうした知識を得る際に、なぜ他人の証言を信頼することができるのだろうか。

こうした証言の信頼性をめぐる問いは、現代の英米圏では証言の認識論 (*The Epistemology of Testimony*) と呼ばれる分野において盛んに論じられている。その流れの中で、ヒュームは、『人間知性研究 (*An Enquiry Concerning Human Understanding*)』第十章「奇跡について」における記述を根拠としながら、証言に関する還元主義 (*Reductionism*) と呼ばれる見解を提出したとみなされることが多い。それによれば、話し手の証言に関する聞き手の信念が正当化されるのは、話し手の証言以外に聞き手がもっている証拠 (感覚、記憶、帰納的推論など) があるとき、かつそのときに限られる。つまり、話し手の証言は、話し手に関する聞き手の感覚や記憶や帰納的推論による根拠づけがあってはじめて、信頼できるものとみなされるのである。本報告では、こうした理解を標準的解釈と呼ぶことにしよう。

本報告の目的は、標準的解釈が誤解を招くものであり、少なくとも自然的徳 (*natural virtue*) の観点から証言の信頼性を考察しようとするヒューム独自の視座を見失っている、という点を明らかにすることにある。本報告では、特にコーディ (*Coady, C. A. J. 1992. Testimony: A Philosophical Study*) とその批判者たちの解釈を検討しながら、証言の信頼性に関してヒュームがどのような見解をもっていたのか、そしてその見解はどの程度まで妥当なのかを論じたい。

【会場案内】

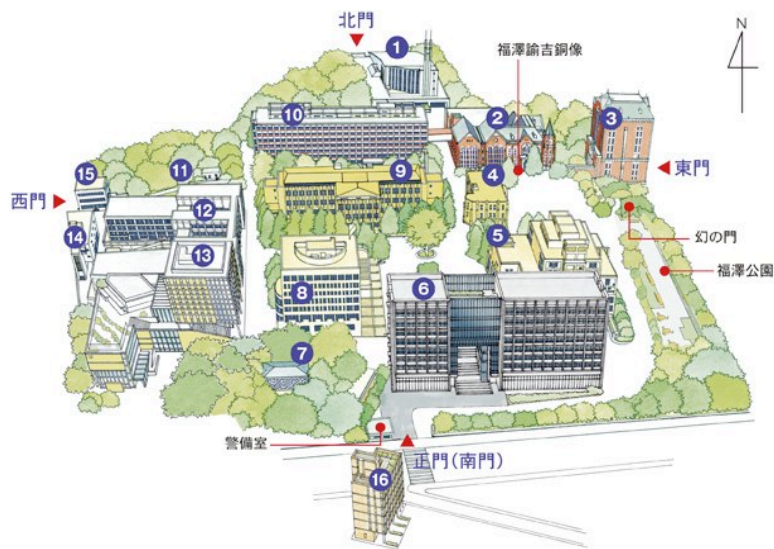


108-8345 東京都港区三田 2-15-45

JR 山手線・京浜東北線 田町駅下車、徒歩 8 分

都営地下鉄浅草線・三田線 三田駅下車、徒歩 7 分

都営地下鉄大江戸線 赤羽橋下車、徒歩 8 分



研究室棟は⑩の建物です